

「底が突き抜けた」時代の歩き方 347

男にはどうしても女が「わからない」

作家の渡辺淳一が『週刊現代』(02・11・30)の連載エッセイで、「人類が、この世に現れて以来、洋の東西を問わず、男にとって女はわからない存在だった」が、「いまだに、男は女がわからない、といっている」。わからない「理由は簡単、男は女のことを考えなかったからである」と非常に明解に説いている。「女はいまどう思い、どう感じているか。そういうことをいちいち詮索したり、案じることがほとんどなく、そういう状態に慣れ親しんでいるうちに、あるとき突然、女にいわれたり、批判されて愕然とする。／だが、もともと女の気持ちを考えることなぞなかったのだから、驚き慌てふためくのは当然。」

では、なぜ男は女の気持ちを考えてこなかったのか。「これまで男はあまり、女の気持ちを考える必要がなかったから」だ。「これまでは男尊女卑とまではいなくても、男性中心社会で、男の考えだけが社会的に、受け入れられ、認められてきた。／おかげで、男たちは自分の考えや感じ方で女性を引っ張っていけば、女性は従ってくるものと思いついてきた。／大体、男は自分より立場が上の人や、際き合って利益になる人の意見はよくきき、相手の気持ちをいろいろ憶測するが、自分より下の者とか、利益にならない人のことは、ほとんど考えないか無視してしまう。／そして当然のことながら、夫が妻のことを考えても、目先、あまり得にはならないから、無視してきた。」

しかし、この20年間くらいで、女性も積極的に社会進出する一方、バブル崩壊以降の長期的な不況の中で、リストラや賃下げ等によって会社人間としての男性の地位が低下し、家庭での居心地も揺らいできた。「ここで男たちは改めて、女の意見をきき、さらにはきかされて、驚き仰天する。／まさか、妻たちがそんなことを思い、そんなことを考えていたとはつゆ知らず、突然、まったく違う意見をきかされて、急に自信を失い不安になる。」

「男と逆に、女のほうは立場上、男の意見には常に耳を傾けてきた。／男性中心社会である以上、そうしなければ生きにくいから、それに従ってきた分だけ、男のことはわかってきた。というより、できるだけ、わかろうと努めてきた。／この関係は、ちょうど、人間と犬の関係に似ている。／それというのも、人間は犬を飼っているから、犬はいま小便をしたいだろうとか、お腹が減っているだろう、程度のことしか考えていなかった。／しかし犬は人間さまに養われて、人間さまを失うと生きていけないので、飼い主の一挙手一投足を懸命に見つめ、それに合わせて動き、従ってきた。／だがこの立場が変わ

って、人間も犬の一挙手一投足で、生存をおびやかされるとしたら、みな懸命に犬を見つめ、犬の気持ちをわかろうと努めるに違いない。」

いまこの逆転現象が男と女の間で生じており、したがって、「これからはもはや、男も女の一挙手一投足を常に見て、そこから女性の気持ちを考え、理解しなければ、生きていけない時代になってくる。」本当の意味での男女平等の時代が到来しており、「ここから、男と女が本当に理解し合える新しい時代が始まる」けれども、「本当の意味で、男と女が心底からわかり合えることはないだろう。」それは、「男と女はまったく違う生き物だから」だ。

違いは体を見れば歴然としており、「とくにお腹から下の、下半身を見たら一目瞭然。これだけ外形が違ううえに、体の中を流れているホルモンまで違うのだから。感性から考え方まで違うのは当然である。／男は永遠に、下半身の一物がない状態を想像できないし、女は永遠に、下半身にあんなものがぶら下がっている状態が想像できない。／かくして、生理の根源的な点で、男と女はわかり合うことができないが、だからこそ惹かれ合うともいえる。」

結論はだから、はっきりとしている。「これほど違う生きものだからこそ、男と女はよく話し合い、意見を戦わせ、互いを少しでもわかるように努めるべきである。／そして違うからこそ、話せば互いに教えられ、学び、感心することも多いのである。／もちろん、話せばすべてわかるというわけではないけれど、わかり合おうとしないで、わかることなどありえないことだけはたしかである。」

男女がお互いにわからなければ、わかり合えるように努めるべきだということになるが、しかし、男が女のことなら「知っている」と思い込んでいる事態の厄介さについて、解剖学者の養老孟司が『中央公論』(02・11)の連続エッセイでこう指摘している。「私の大学の学生たちに、昨年あるビデオを見せた。イギリス人の若夫婦が子どもを作ろうと思い、妊娠し、出産するまでを記録した、BBC 作品である。50分なので、一時間半の授業では余りが出る。その時間を使ってビデオの感想をレポートに書いてもらった。

薬学部なので女の子のほうが多かった。レポートの中身はよく似ていて、ほとんどの女子学生が、あれも知らなかった、これもはじめて気がついたと、妊娠と出産について、さまざまな新知識を得たと書いてくれた。

驚いたのは、男子学生のレポートである。一割足らずの学生が、母親がどんな思いで自分を生んでくれたか、はじめてしみじみ考えたと書いた。残りの学生はどうだったか。似たようなビデオを高校の保健の時間に見た。とくに新しいこともなく、あんなことならもうすでに知っている。9割がそう書いたのである。」

そのビデオがすでに見た「似たようなビデオ」であったわけではない。9割の男子学生にはすでに見たものとはしか思われなかったのである。すでに見たものであるかどうかではなく、見てどのように感じたかを問うているのに、「あんなことならもうすでに知

っている」ところから、前へ半歩でも突き進もうとはしない。「もうすでに知っている」ことが、彼らにどのような内省を促しているのかは全くみえてこない。おそらくそのような人間には、どんなものを見せても、見たことがある、「もうすでに知っている」という反応しか返ってこないだろう。問題は、よく似たビデオの側にあるのではなく、よく似たビデオとして通過してしまう彼らの心の平板さにあることは間違いない。

「それなら知っている。テロなら『知っている』。アフガンが爆撃されたことは『知っている』。男子は子どもを産むことはない。夫婦の思わぬ離間は結婚以前にすでに始まっているのである。厚生労働省の研究所の調査でわかっていることだが、日本の普通の家庭では、結婚後15年まで、夫から妻への愛情は横ばいだが、妻から夫への愛情はひたすら右肩下がりなのである。

統計的な解析で、その理由までわかっている。『夫が子育てに協力しなかった』。それが理由である。右肩下がりで、最後は定年離婚に至る。その遠因は子育てにある。子育てへの協力とは、オムツを洗うことでも、炊事をすることでもない。生む性への理解である。それに対して、すでに結婚前の若者たちが、『そんなことはすでに知っている』という。」

女性が子どもを産むことを「知っている」ことと、テロなら「知っている」ことが、同じこととして語られている。女性が子どもを産むことを「知っている」ことが、「生む性への理解」にまで深まらなければ、「知っている」ことは全く非力であり、何の役にも立たない。テロなら「知っている」ことについても同じことがいえる。どこまで自分の問題として引き寄せることができるか、ということだ。「知っている」ことは、対岸の火事を見ていることにすぎないのである。

「われわれはなにごとであれ、『すでに知っている』世界に住んでいる。なに、なにも知ってやしないのである。テロの現場にいたところで、ほとんど五里霧中、すぐ身の回りのことですらよくわからないはずである。何十年一緒に住んで、女房の気持ちなどがどこまでわかるか。それがわかっているなら、自分が考えることが正しいと思いつめて、飛行機を乗っ取って、ビルに突っ込んだりはしないはずである。」

ここは立ち止まって考えこまなくてはならない。「生む性への理解」があれば、テロに走るようなことはありえないといっているからだ。逆にいえば、テロは「生む性への理解」の欠如から起こるということである。テロリストの心情と「生む性への理解」とは背反しているからだ。つまり、いまある人間を殺す行為と新たな子ども(人間)を生みだす行為とは相容れない。養老孟司は、男が女をわかろうと努めるなら、テロルの心情が入り込む隙間などありやしないとすらいつてのけているように聞こえる。ということは、女、子供を巻き添えにしていく戦争など起こりやしないということである。だから戦争がたえまなく続いているということは、『すでに知っている』世界の中で、男は「生む性」である女に対してなにひとつ、わかっちゃいねえ、ということになるのだろう。

もちろん、「生む性への理解」が頭の中の理解にとどまっている限りは、「あんなこと

ならもうすでに知っている」というところに収まってしまふ。まずは女房が日常やっていることをやってみることだ。オムツを洗ったり、炊事することから始めても構わない。ただし、養老孟司が「子育てへの協力とは、オムツを洗うことでも、炊事することでもない。生む性への理解である。」といているように、役割分担の義務としてオムツを洗い、炊事をしている限りは、「子育てへの協力」にも「生む性への理解」にもつながらない。だからといって、何もしないことがつながるわけではない。問題は、ビデオを見た男子の「一割足らずの学生が、母親がどんな思いで自分を生んでくれたか、はじめてしみじみ考えた」ように、オムツを洗い炊事することで、女性がどんな思いで毎日オムツを洗い炊事をしているのか、しみじみ考えてみることであり、相手への共感が素直なかたちで湧き上がってくるようになることだ。

「12月の重りをおなかに付けて階段を上がった洗濯物を干したり。間もなくパパになる人を対象にした 妊娠体験 が神戸や姫路の保健所などで人気を呼んでいる」と、02.12.8付け神戸新聞のコラム『正平調』が冒頭に書き記しており、この試みも「生む性への理解」を深めようとする一助にほかならない。文章は次のように続いている。「身重の妻のつらさを体感し夫婦二人三脚で出産に臨んでもらおうという『両親教室』の一コマだが、この体験目当てに参加する夫が多いという。妻の出産に立ち会うことさえ珍しかったひと昔前に比べると男性の意識も随分変わってきた 意識変革は子育てについても顕著だ。父と子のイベントはいずれも盛況で、兵庫県立こどもの館（姫路市）では、父子で工作などを楽しむ催しに今年は2千4百人余りが集まった。館長の有本まゆみさんは『子どもとのふれあいを求める父親が着実に増えている』と話す そんな優しいお父さんも、多くは仕事人間だ。わが子の顔が浮かんでも、なかなか職場を離れられない。それならと有本さんらは三年前から県内の企業に出向き交流会を開いている。管理職らに父親の役割への認識を深めてもらうのが主な狙いという 変わってきたとはいえ育児はまだまだお母さんが主役だ。こどもの館への子育てに関する電話相談も母親が9割以上を占める。ただでさえ雇用悪化で男性社員の5人に一人が月80時間以上残業している。相談に『夫が悩みを聞いてくれない』が目立つのもうなずける 赤ちゃんは年々減り続け、子どもをめぐる問題も深刻さを増す。対策は待たなしたが、基本は夫婦二人三脚の出産、育児だ。パパや社会の意識改革にあしたがかかっている。」

妊娠体験 などの例は、確かに男などもやってみる必要があるし、妊娠がいかにか女性にとって大変な負担であるかを身をもって知ることになるのは間違いない。だが他方で、男性だけでなく女性自身にとっても、自分の体についての相変わらずの無知が横行していることを、脚本家の大石静が『週刊文春』（02.11.29）の連続エッセイで披露している。最近の産婦人科では子宮筋腫の手術に関するかわいいイラストつきのパンフレットを作っているのに、それを読まずに、「卵巣って子宮の中にあるんでしょ」なんて、とんでもない質問をする患者も多く、「子宮筋腫は筋腫だけ摘出する手術と、子

宮ごと取ってしまう手術とあるが、子宮がなくなったら女じゃなくなるというような、ナンセンスな思い込みのために、お腹の筋腫が十キロにもなって寝たきり状態なのに、手術を拒否している人もいるそうだ。」

「男性読者達よ！ 卵巣と子宮の位置関係くらい、ちゃんとわかっているでしょうね？」と念押ししながら、女性ホルモンは卵巣から分泌されており、子どもを宿す子宮は使わなければならないところなのに、「子宮がなくなったらセックスできないんですよ」というアホらしい質問をする男性が多いとあって、こう説明する。「子宮を取った後、膣の奥を閉じるが、膣が短くなることはなく、「どちらかといえば、避妊も必要なくなるし、子供を作る予定がなければ、子宮がない方が快適とも言える。」5年前に筋腫と一緒に子宮を摘出した彼女は、「子宮なんてあってもなくても、その人格に変わりはないし、奥歯が一本抜けたような程度の問題」であり、「そんなことで女でなくなったという意識はないし、ことさら言うことでもないが、隠す気もない」し、「そのことで差別されたり、バカにされたりした覚えもない。」

そして子宮を失くした女性たちは自分たちで慰め合ったりせず、「男達が無知なら、そのつど説明したらいいと思う。そのくらいの力もなくて、どうやって生きて行くんだろう。」と発破をかけ、「男性も、女性の体については、もっと知るべきだ。性教育を充実させるなら、避妊教育の前に、体のメカニズムを教えた方がいい。」と強調する。その大石静はまた、自分の体に対する無知のみならず、食品に対する無知が若い女性の間で罷り通っていることを、02.12.14付産経新聞で取り上げている。

料理の勉強にフランスに渡って12年ぶりに帰国し、今、女子大の家政科で教壇に立っている友人によれば、「20歳から21歳の学生の8割は料理をしない。出来合いのものは買うし、外食はするが、料理の材料を買ったことがない。だから食品名も知らない。ゆりね、じねんじょなどという野菜の名前は完璧（かんぺき）に通じない。驚いたのは、みりん という調味料を知らない学生が半数もいたことだ。

アンケートを取ったら、一人暮らしの学生の台所にある調味料は、醤油（しょうゆ）と塩と胡椒（こしょう）のみ。味噌（みそ）もみりんも酒も、使わないから置かないと、ほとんどの学生が答えた。」

友人の愁いに続いて、大石静がいう。

「これが家政科の学生である。彼女が教えている大学のレベルが、きわめて低かったとしても、大学は大学だ。家政学を専攻するというのが、どういうことなのかという、根本的なことも考えたことのない学生ばかりというのは、恐ろしい現実だ。

雑誌の編集部には、妙な電話もかかってくる。『鶏肉を焼いているんですけど、レシピに書かれた通りにやっても焼けません』

そのレシピには鶏肉の皮にフォークを刺し、味がしみこみやすくするように書かれていた。電話の女性は、鶏肉にフォークをつき刺したまま、フライパンで焼こうとしてい

たのである。

『ご飯の泡がなかなか消えないんですけど』という電話の主は、お米を洗剤で洗っていた。」

この「恐ろしい現実」に対して、彼女は流石に苦言を呈する。「女が料理をしないのは、けしからんというようなことを言う気は、もちろんない。人間としての最低の常識を問うているのだ。／そして何より、食べるということは、自らの命を養う行為だ。食品に対し無知であることは、命に対して無知であるということに他ならない。」と。そして先の友人は、「日本は12年の間に、なんて恐ろしい国になってしまったの」と言った。

そう、とんでもなく「恐ろしい」事態というほかない。こんなバカな女の子たちの大量出現の向こうには、日本の崩壊しつつある（いや、すでに崩壊している）バカな家庭の現実やバカな教育の現実がひしめきあっているからだ。みりん も知らない。お米も満足に研ぐことのできない女の子は、少なくともどのような家庭で育ち、何を学校で学んできたのかといった多くのことを我々に教えてくれている。友人の「なんて恐ろしい国」とは、一人できちんと生きていける若者が日本では満足に育っていないということにほかならない。

いまこの文章を書いているテーマは、男には女が「わからない」であるが、このようなあまりにも愚かな女（や男）の前では当然ながら、こんなテーマも吹っ飛んでしまう。なぜなら、自らの無知に対する羞恥心のない人間（男女を問わず）に興味や関心を募らせるということ自体が、どだい無理な話であるからだ。大石静風にいえば、「人間としての最低の常識」に気づかぬまま成人してしまった人間に、男や女としての人間の魅力を求めること自体、無い物ねだりなのである。人間としての魅力のない相手をおかろうとする衝動を欠如させているのも、我々人間の特性なのだ。大石静は文面では、「無知」という言葉を連発してマスコミ規制に引っ掛からないように抑制しているけれども、本当は「バカ」を連発したかったんだろうということが行間に滲んでいる。

さてこの大石静は、「生む性への理解」を深めるために夫が妻の出産に立ち会うことも珍しくなくなっている今どきの出産風景にも、『週刊文春』（02・8・23-30）の中で物申している。彼女と同年代の産婦人科の女医さんによれば、「出産に立ち会った産婦の夫が、あまりの凄まじさに衝撃を受け、分娩室で卒倒してしまう」ケースが多く、「分娩室で倒れてしまう夫は、現場の医師、助産婦、看護婦らにとっては、ただの迷惑な存在でしかなく、更にこういう夫は、励まさなければならぬ産婦にも逆に心配をかけ、足を引っ張っている」とこぼす。面白いのは、「分娩室で倒れる夫の多くは、医者が何をするかわからないので、監視のために立ち会いたいと、堂々と申し出る医療不信型」で、「偉そうなことを言うわりに、根性のすわってない情けないタイプであり、「医者を監視するなら、もっと徹底的に監視しろよ、倒れてる場合かよ、バカヤロウ！ とその女医さんは、いつも思う。」

夫の立ち会いを奨励している病院もある中で、この女医さんは「きわめて否定的」で、

「あんなものは人に見せるものじゃないのよ」ときっぱり言う。「生命誕生の瞬間、なんていうきれいな事では済まないのがお産だからで、昔から、産屋^{うぶや} という所が、男子禁制なのには、それなりの意味があるのだ。

今と違って、子供をひとりでも多く作るのが夫婦の使命だった時代には、夫が妻に欲望を感じなくなったら一大事だ。だから、お産も不浄なものとして男を近づけないようにしていたのだ。

つつまじやかな恥じらいなぞ、お産の時はぶっ飛んじやうものね。だから見せないようにしていたのだ。

子供を産んだ後は北の納戸で、おかゆと梅干をすすりながら休養するというのも、実は理にかなっている。北側の納戸なんか押し込められて、ろくなものも食べさせてもらえず、昔の嫁は虐げられていて気の毒だと思うのは間違いだ。北側は日が当たらないが、その分静かで、高揚した気分を鎮めるのにいい場所であり、おかゆは水分豊富で胃腸にやさしく、梅干には殺菌力がある。先人は理にかなった知恵を伝えているのだ。

女医さんは、母親学級でそういう先人の知恵を語り、夫が立ち会いたいと自ら望まない限り、自分から傍にいて……なんて甘ったれないように、指導しているそうだ。」

この女医さんの説得力のある話を聞いて、大石静は「若い夫の間では、お産に立ち会うことで、何か突き抜けた感動が欲しいと、やたらと感動に飢えている人が増えている。先の見えない不景気に将来の不安を抱き、職場でも閉塞感を感じているせいだろうか。何でもかんでも感動したい症候群に陥っている若者が多いようだ。」と、Wカップの異常な盛り上がりと同列に並べ、彼女の知っている男性が「愛する妻の力になりたいと心から思ったし、自らの子供の誕生に立ち会いたいと切に願っ」て、妻のお産に立ち会った「にもかかわらず、それから妻を抱くことが不可能になった」例を取り上げる。

「子供が生まれる瞬間まではテレビの自宅出産ドキュメンタリーでも見たことがあり、想像を越えるほどに驚くこともなかったのだが、ショックだったのは、いつもの妻からは想像できない姿態と、動物のようなうめき声。極めつけは、胎盤が出る時の凄まじさだ。あれを目の当たりにしてからは、妻はかわいい女ではなく、偉大なるメスになってしまって、尊敬はするが、欲望は見事に感じなくなった。

この夫婦は、それから10年後に離婚している。離婚原因がお産の立ち会いとその後の夫婦関係のなさに関係していたかどうかは、わからない。さすがの私もストレートには聞けなかった。

しかし原因が何であれ、10年という時間を、まだ年若い妻がどんなに淋しい思いで過ごしたかと思うと、胸が痛い。」

かつて流行ったラマーズ法については、彼女も仲のいいことの表現として滑稽さもこめて、「しばしば、ドラマの中で『ヒッヒッフー』と呼吸の練習をする夫婦を描いた」が、お産そのもののシーンは「極力描かないようにしている。」

「あれをやるのは同性として耐えがたい。女性のお産の苦しみをエンターテインメントにする気にもなれない。面白おかしく見られたくない、と思うからである。女優が、霧吹きで額に汗らしき水滴をつけ、必死で演技するのも、たまらなく気恥ずかしい。そう思うと書けないのである。

生殖に関わる役割以外では、もはや男と女を性別で分けて考える時代は終わった。それは当然のことだ。しかし、生殖に関わる部分だけは、やっぱり男の領分と女の領分があり、それぞれの役割があると思う。本当にここだけは……。」

陣痛は分かち合えなくても、育児は分かち合えるのであり、「男と女が何でもかんでも手に手をたずさえて生きるのが愛だとも思わない。」もたれ合わずに自立して生きる大人の関係に立てば、「本当に分かち合えることを、きちんと分かち合う方が、よほど大きな愛情じゃないのだろうか。」と、夫婦一体化の幻想に疑問を投げかけている。この「家族は一心同体」という幻想を見事に打ち砕いているエッセイを、「GE横河メディカルシステム」という会社が公募しているエッセイの審査員をつとめている先の渡辺淳一が、『週刊現代』(02・12・21)で紹介している。大賞受賞作品で、作者は中国人の夫と結婚しているフリーライターの井藤和美という34歳の女性である。

渡辺淳一によれば、「この長年、日本人が信じてきた思いこみを、明らかに誤りとし、親子はもちろん、夫婦も別の人格で、だからこそ個性があり、互いを尊重していける、という考え」がそこには貫かれており、「逆に、家族は一体、という考えは、一体であらねばならないと強要することにより、個の人格から趣味嗜好、さらには個性までつぶすことになるという。」

「具体的には、夫婦とか家族で同じ印鑑さえ持てば、配偶者や子供名義で通帳をつくれて、場合によっては誰の預金でも引き出すことができる。さらに日本の社会では、住民基本台帳の「個人」コードが「世帯」で届くような無神経なところがあり、こういう曖昧さが、ひいては、個人の権利と責任を不明確にし、自分の財産管理など、生きていくうえで必要な諸手続きが、家庭内の強者(父とか夫)に握られることになりかねない、という。

また行政自体も、住民を夫婦とか所帯単位でしか把握しない制度をつくりあげ、それに安住している。

そしてさらに、この家族の一体感が、家庭内暴力や幼児虐待を見えにくくし、お母さんが子をいじめるわけがない、という思いこみが、悲劇を増幅している、と指摘する。」

ここには社会だけでなく、本当の意味で家族においてもお互いに個性を育てていかななくてはならない生き様が示されている。日本の社会では、世間の外に対して家族の内ではかばい合う関係がずっと存続しており、「家族は一心同体」という幻想にくるまれたところでは、一個の人間として自立しにくく、独自の個性が育てられていくのに大きな障害となっている。フリーターやパラサイト・シングルが増加や、日本でしか見られない「引きこもり」の事態などは家族の一体化幻想に起因する家族の病であり、家族もまた、

お互いに鍛え合いながら一緒に暮らしていく関係であるという視点が欠如しているところから惹き起こされている。

最後に、先に話題になった石原東京都知事の「文明がもたらしたもっとも悪しき有害なものはババア」発言にかかわる学者の言説に注目しておきたい。東大教授松井孝典と生物学者の早稲田大教授長谷川真理子が『中央公論』(01.5)で対談しており、生物学的人間論について、「現生人類の起源には、多地域進化説と出アフリカ説とがあり、後者が有力になりつつある。現生人類はなぜアフリカから拡散したのか？あるいは、数万年前、同じ地域に存在したネアンデルタール人が絶滅し、ホモ・サピエンスが繁栄したのはなぜか？現生人類はなぜ人間圏をつくって生き始めたのか？」(対談後の松井要約)など、興味あるテーマが話し合われる中で最も興味を引いたのは、「ヒトだけにおばあさんがいる」ことの不思議という長谷川発言である。

「男が長生きになるのは不思議はないのですけれど、女の方が長生きになるのは本当にわからないのです。男性の場合は生殖能力はだんだん低くなっても続くから、長く生きていていいわけです。病気などのストレスが取り除かれれば長く生きられるようになるでしょう。だけど女性というのはある日突然卵がなくなってしまうのに、その後なぜ生きていくかというのは、すごく進化的に不思議なことなのです。」という。「ネアンデルタール人は生殖年齢が終わるとともに死んでいたと考えられます。最後の子が離乳するかしないかのうちに死にます。だから最後の子はちゃんと見届けられるかどうかわからない。」哺乳類のメスにとって卵がなくなる「更年期障害というのは生物として越えられないすごいストレス」で、みんな死んでしまうのに、人間の場合、「卵が出ないおばあさんというのがなぜ本当の意味で生きていくかというのは、進化的には分からない」。

おばあさんの存在が現生人類の繁栄にとって「非常に本質的な点」であり、「祖母の知恵が、娘が母親になるときの孫の生存率を上げたのではないか」という「グランドマザー仮説」も示されているが、人口の増加と長期の寿命によって環境に「二重の負担がかかる」中で、「でもそれから豊かになると出生率が減るでしょう。進化的に生物として考えると、自らの繁殖率を減らそうとする生き物はいないわけです。豊かになるということは条件がよくなるわけで、条件がよくなると普通はもっと産むので、だから人間がどうして豊かな暮らしになればなるほど持ちたい子供の数が減るのかなと。」つまり、「おばあさんが存在するという不思議と、もうひとつは豊かさがあるところに達すると産まなくなるという不思議」への疑問である。更に、おばあさんの存在という特徴以外に、現生人類の特徴として、目の前で起こっていない現象でも説明することができる言語能力の格段の高さがあり、この二大特徴によって現生人類の繁栄がもたらされていることがわかる。男には女が「わからない」というテーマに即すると、おばあさんの存在の不思議こそは、女の「わからなさ」を男に永遠に突きつけている問いでありつづけるような気がする。

2002年12月23日記

